
1582

リーブズ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1582

【Nコード】

N0044W

【作者名】

リーブズ

【あらすじ】

極道の社会に生きるA氏は、ある日風呂場で見たままの悪魔に出会う。「俺用の服を特注してくれる代わりに、お前の嫌いな、ボスを殺してやろう」悪魔の甘言に乗せられたA氏は悪魔と契約を交わし、見事ボスを死に至らしめるが――

A氏の前に悪魔が現れたのは、彼が湯船に浸かっている時だった。A氏は悪魔に驚き、水飛沫を立てて後ずさった。といっても狭い浴槽の中では、五十センチも引くことができなかったのだが。

背中を貼り付けているのとは反対側の淵に、悪魔は招き猫のようにぼつねんと座っていた。高さは近くに置いてある洗面器と同程度。身体中が深い紫色で覆われているのが不気味で不快だった。細長い身体の間からはコウモリのような羽、尻からは尖った尻尾が生えており、いかにも悪魔らしい妖気を纏っていた。

「虫じゃないよな」顔を少しずつ近づけてみるが、悪魔は微動だにしない。「一体どこから……」

A氏は直後に首を振り、もし悪魔ならワープぐらいできてもおかしくなと思った。どうしたものかと目を瞬かせていると、悪魔は口を開いた。普通の人間の男声だった。

「察しの通り悪魔だ。しかし三つの願いを叶えるかわりに魂をもらったりはしない。安心しろ、魂の味なんてとつくに飽きた」

「はあ……」

「とりあえず何でもお望みのものを言ってみな」

A氏はそれを聞き、両手で湯をすくって悪魔にぶちまけた。悪魔と名乗っておきながら、ノーリスクで願いを叶えてくれる訳がない。また、契約を拒否したところで付きまとってくるようでは、碌なことにならない。この場で追い払うべきと考えたのだ。A氏は部屋に置いてある銃を取ってこようかとも考えたが、火薬が濡れては使えないことに気付いた。

湯をぶちまけた先に、悪魔はいつの間にか居なくなっていた。どこに行った？ とA氏が辺りを見回すと、悪魔が天井に居るのを発見した。ちょうどコウモリのように、逆さまにぶら下がっていた。「いきなり交渉決裂か。それにしても手荒だな」

「うるさい」近くにあった手拭いに湯を染み込ませ、悪魔に向かって投げつける。しかしまたしても悪魔は一瞬で消え去った。

「人間が悪魔を殺すなんて、無理さ。諦めな」

今度は床に瞬間移動していた。

A氏は浴槽から身を乗り出し、洗面器を掴んだ。大きく振りかぶって脳天目がけて叩き付けた。

乾いた音が反響する。手ごたえは無かった。

「諦めが悪いぞ」悪魔はA氏の左肩の上で囁いた。

その瞬間、A氏の意識は途切れた。

A氏は布団の上で目を覚ました。足越しに、障子から朝日が差し込んでいることが分かる。十畳もある広い和室は、間違いなくA氏の家だった。銃をしまっている引き出しや、掛け軸もいつもの位置にあった。さっきのことは夢だったのか……

「夢じゃないぜ」悪魔はのれんをくぐるようにして掛け軸の裏から現れた。「さあ契約だ」

A氏は目を丸くしたあと、「消えてくれ」と睨みつけるようにして言った。

「そう言っな。……よく考えたんだが、お前は、悪魔である俺が何のメリットもないのに願いを叶えてやるというのが疑わしくて拒否しているんだろう？」

A氏は首をわずかに縦に振った

「なら、お前の願いを一つ叶えてやる代わりに、条件を一つ付きつけよう。……俺専用の、高級な服を作ってくれ」

「……は？ そんなことでいいのか？」

「ああ。悪魔に裸も何もないのだが、最近お洒落に目覚め始めたという訳さ。悪魔の世界も進歩しているんだよ」

「悪魔の言うことだ。信じられるか」

「お前が信じるか信じないかなんて知らないが、俺は契約が成立す

るまで永遠に付きまとう。そうして毎日契約を迫る。腹をくくるがいい」

「そうということなら……」

A氏はしぶしぶ職人呼んだ。悪魔の存在は隠しつつ、数日かけてちょうど良いサイズの服を作らせた。

「満足だ」緑色の浴衣のような服をまとった悪魔が言った。

「じゃあ」

「そうだ。願いを一つだけ叶えてやろう」

A氏は悪魔に願いを伝えた。

自分は日々死線に立って戦闘を続ける組織の幹部に属している。敵対する組織と闘い、勝利することによって利益を得ている。度重なる勝利、吸収合併により我が組織はかなりの規模になった。しかし規模が大きくなってからというもの、もともと傲慢なボスが目に余る行動を取り始めるようになったのだ。古い付き合いの仲間が機嫌が悪いという理由で殺されたとき、我々の怒りは頂点に達した。今こそ下剋上の時だ、と。

「なるほどな」悪魔はうなずいた。

「どうすればいいんだ」

「俺がそのボスを頓死させてもべつにいいんだが、さすがに不自然だろうな……ではお前がクーデターを起こした暁には、必ずボスが死ぬように便宜を図ってやろう」

「分かった。では、今週中に決起するでしょう」A氏は反旗を翻す決心をした。

そして四日後、A氏は同志を集め、京都の別荘に宿泊していると、いうボスを襲った。しかし事はうまく運ばなかった。あちこちに何十人ものボディーガードが潜んでいたのだ。たちまちの内に敵の増援が駆けつけ、弾幕が展開された。銃声が飛び交う中、刃物をもつて白兵戦を挑む者達もいた。

A氏は落ち着き払った様子で遠くから事態の鎮静化を待っていた。悪魔が手助けしてくれているのだから、成功するはずだ。焦る必要

はない……

その時どこからか叫び声が上がった。

A氏は辺りを見回した。すると、付近一帯が燃え上がっているのが見えた。さらに火薬か何かに引火したのか、爆発音が轟き騒然となった。

「人が来るかもしれないな」A氏は味方に合図を出し、戦闘を離脱した。敵も全く同じ考えのもと引き揚げていった。

A氏は内心、作戦は成功したのだろうかと心配していた。

翌日、和室の障子を開けて入ってきたのは悪魔だった。「知らないかもしれないが、予定通りボスは死んだぜ」

「いつの間に」A氏は口角を上げながらも驚いた。「しかしどうも、こうあっさりしていては復讐した感じが……」

「何言ってるんだ。お前が決起しなければ成し遂げられなかった結果なんだ。お前自身が、手を下したんだ」

「それもそうだな……」

悪魔はそれを聞き、細長い赤目を歪ませた。

ボスの亡きあと、A氏の暮らしは順調そのもの。A氏はまさに天狗になりかけていた。今や悪魔のことなど、すっかり忘れている。

「いい気分だ」ある新築のベランダで、A氏はやや暗くなりかけている空を眺めながら言った。その下には、町人で賑わう商店街が続いていた。

そのとき、部下が部屋の前で騒ぐ声が聞こえてきた。あまりにも騒がしいので、これはただごとではないと感じたA氏はふすまを開けた。

「どうしたんだ」

「見張りからの報せです。旧ボス派が襲撃に来る模様です」

「なんだと」聞かぬやいなや、A氏は部下と共に逃げ出した。

一方、服を着た悪魔は旧ボス派をまとめる者と共に行動していた。

周りにはむくつけき部下が群れを成していた。

悪魔が肩の上から囁いた。「どうやら逃げ出したようだぜ」

「よし」そして彼は大音声を上げた。「おのれ明智、信長様の仇――」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0044w/>

1582

2011年8月22日03時33分発行